

ケアの意味を見つめる事例研究

山本則子

2021/07/08

この発表は、JSPS基盤研究(B)「卓越したケアの伝播/継承を可能にする事例研究方法の開発」(研究代表者山本則子)の成果の一部である。

共同研究者: 吉田滋子・齋藤凡・山花令子・柄澤清美・野口麻衣子・池田真理・望月由紀・家高洋・榊原哲也・孫大輔・宮本有紀・石原孝二

実践現場に直結し、役立つ形でまとめたい

量的研究では表現できないもどかしさ
複数の事例を統合すると消えてしまうニュアンスがある
淡々とした事例の記述ではポイントがつかめない



- 忙しい現場で15分で読める
- ポイントをつかんで活用できる
- 学問性を保証する

「ケアの意味を見つめる事例研究」の開発へ

訪問看護師が実践する家族への意思決定支援： 胃瘻造設の決定を支援した訪問看護の事例

安塚則子 他（2015） 家族看護学研究

1. 介護負担を軽減し心身に余裕を



- a. 負担の大きい介護を代行する

2. 情報過多による混乱を助ける



- a. 最低限の情報の補正
- b. よく聞いて情報整理を手伝う
- c. 看護師の意見を言わない

3. 意思決定の重責を緩和



- a. いかなる意思決定でも支えることを伝える
- b. 時間がかかっても良いことを伝える
- c. 本人の意向が探れないか試みる

4. 後悔しないよう利用者の状態の改善に努める

- a. 患者が笑顔で食べられるよう摂食の援助：「うちは胃ろうにして良かった」と思ってもらう

- 「なぜうまくいったのか」「この実践から何を学び取ればいいのか」が伝わる言葉をつくる

- 看護行為の意義を明示 >>> 実践知(暗黙知)を取り扱い可能に

>>> 読者を触発し、患者さんとの向き合い方が変わる

始めの一步：事例研究どこから始まる？

- ある事例を振り返りたいと思うときは、次に活かせるなんらかの学びを得ている可能性が高い
- 何故だか印象深く覚えてる
- 後悔の残る事例 より うれしい気持ちの残る事例 なぜ？
- 「明日の患者さんにより良いケアをしたい」「自分だけではなくて、ほかの人にも学びになってほしい」
- 足し算の看護学 vs 引き算の看護学
- 看護の知の蓄積
- なにより、やってて楽しい！
- 看護の意味を意識化する。自分のやっていることの価値がわかる
- 現場を元気にする事例研究、でありたい

事例提供者になってみると

- 褒められるって、いくつになってもうれしい
- 想像以上にうれしいものだな(笑)
- 明日からも頑張ろうと思える

なぜ印象に残ったかは、はじめはわからない(意識化されていない)

- 分析してみる
- 実践の意識化・言語化
- 学会発表(事例からの学びをまとめる)
- (文献を見してみる)
- 共有したら他の人にもきっと役立つ！と思える新規性(言葉づくりまたは詳細な記述)があるか
- 論文を書こう

事例研究のステップとしかけ

意識化/言語化

しかけ
「ワークシート」
「語り合い」
「問われ語り」

メタファー化

しかけ
「キャッチコピー」
「大・小見出し」
「表づくり」

文章化

しかけ
「前例を真似る」

実践知(=「意味」「キモ」「コツ」)を言葉にする
看護の可視化・共有可能性の獲得

意識化/言語化:ワークシート

事例研究ワークシート ver.7.0 (06/01/2017)

事例 (イニシャル))さん ()歳 (男性・女性)

どうしてこの事例を紹介しようと思ったか (タイトルへの第一歩) :

事例を取り上げた理由

事例の概要:

事例の概要

事例の経過と看護実践

前期

1. 時期ごとに思いつくままに以下についてまとめ
- ・患者・利用者、家族の言葉と様子
 - ・看護師が考えたこと
 - ・実践内容
 - ・患者・利用者・家族の反応

患者さんの経過を書くのは慣れているけれど。。。
看護師が何をしたか、
看護師が何を観て、捉えて、考えて、
何を意図して、何に気をつけながら、
具体的にどうしたのか
看護師を主語にして詳細に書こう！

おおまかな時期ごとに以下の点を書き出す

- ・利用者・家族の状況
- ・看護師が考えたこと
- ・実践内容(思いつくまま書き出す)
- ・利用者家族の反応・変化

患者、利用
者、家族の
反応・変
化?

「事例研究ワークシート」のファイルは、東京大学 高齢者在宅長期ケア看護学分野ホームページよりダウンロードできます。

http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/j_201512.html

ワークシートに書き出す

- 思い出すままに書き出す。
- 看護記録を見て思い出しながらでも良い
 - 患者・家族の様子
 - 看護師の考えたこと
 - **看護師の行ったこと(詳細に)**
 - 患者・家族の反応
 - 看護師の感じたこと
- 時間の経過に沿って思い出すようにする
- (しかし最初は)順序だっていなくても良い、なるべく詳細に
- 殴り書きOK
- 赤ペンで直さない(生き生きとした記述が失われる危険。)



語り合い・問われ語り

- ワークシートを見ながら、事例についてグループで話す・説明する。

- 「どうしてこの事例を研究したいと思ったのか」
- 「この事例では、どのような良いこと(望ましくないこと)が患者・家族に起こったのか」
- 「そのようなことを起こした看護の実践は、どのようなものだったか」
- その他の質問
 - 「どうしてそうしたの？」
 - 「その実践の意図は何？」
 - 「具体的には何をどうやった？」
 - 「どうしたらそんなにうまくいくの？」

- 初めての人にもわかるように詳細に、熱心に話す。
- 看護師を主語にして話す。
- 関心を持って聞く。問いを立てる

「自分の経験に言葉を与える；
語り合い・問われ語りのなかで、意識化・言語化を促進

事例研究のステップとしかけ

意識化/言語化

しかけ
「ワークシート」
「語り合い」
「問われ語り」

メタファー化

しかけ
「キャッチコピー」
「大・小見出し」
「表づくり」

文章化

しかけ
「前例を真似る」

実践知(=「意味」「キモ」「コツ」)を言葉にする
看護の可視化・共有可能性の獲得

キャッチコピーを作る(メタファー化)

- 「語り合い」の中で、
「それって、『●●●●●●』ってことだよねえ」
「ここでの看護の『キモ』はこれでは？」
と感じられることを言葉に。
- 看護行為の「意味」「キモ」「コツ」を端的に示すことば＝「キャッチコピー」
- これまで使って来たような(教科書に載っているような)言葉を使わないように。現場から取り出される新しい言葉が見つかる
- メタファー化のとりかかりとして、自由に、発想豊かに言葉をつけてみる
- 頭と心を柔らかくして、看護(の素敵さ)をメタファー化できるようになるためのエクササイズとして、ちょっと飛躍して、キャッチコピーを意識して作ってみよう！

良いメタファーを創る

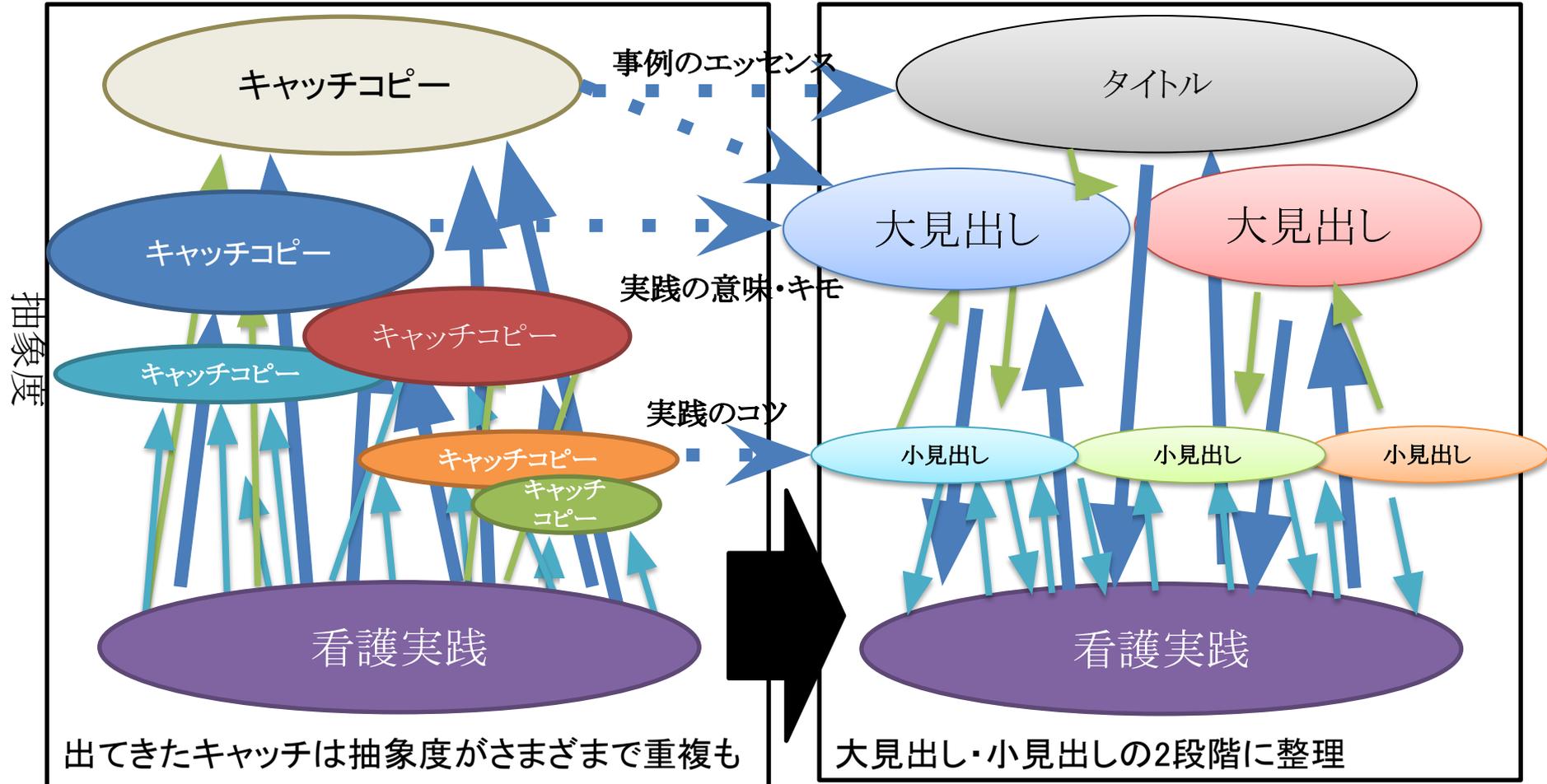
- キャッチコピー作りで、自由に発想する
 - 実践の本質的な性質をイメージでつかまえる
 - GTで言うなら、プロパティ・ディメンションをしっかりおさえる
- 対話(3人以上が良いように見える)の中で、イメージを膨らませ、言葉に落とし込んで捕まえる。
- 機械的に作業だけしてもかならずしも生まれてくれない。
- いろいろな人の多様な意見が入るほうが発想が豊かに(polyphony)。
- 初期に思いついた言葉に引きずられず、イメージで考える
- 性質・特徴を言葉にしてみる
- 看護用語・使用禁忌用語を設ける
- 「整理箱」作りをやめ、実践そのものに迫った名前をつける。
- 何度も何度も作り直して、どの程度他者に「響く」か試す。

自由な発想は自由なグループから生まれる

グループワークのルール

- お互い対等な関係でいましょう
（「～さん」づけで呼びましょう！）
- 相手の話をよく聴きましょう
- 一人が長く話し過ぎないようにしましょう
- 意見の違いを楽しみましょう

キャッチコピーを洗練したり却下・追加したりして 大見出し・小見出しに洗練させる



①キャッチコピーをつける
(発見的推論・メタファー)

繰り返す



②看護実践⇔キャッチコピーのつながりを
何度も確かめつつ、「タイトル」「大見出し」
「小見出し」に修正・整理する
(発見的+演繹的+帰納的推論)。

キャッチコピーから 大見出し・小見出しへ洗練

この事例の「意味」「キモ」「コツ」を表現するための大見出し・小見出しに洗練させるための問い:

- この事例の中心的なできごとはなにか
 - 質問①なぜこの事例を検討したいと思ったのか
 - 質問②どんな良いことが患者・家族に起こったのか
 - 質問③看護師または患者・家族にとっての転機はどこか
- 中心的できごと: 患者が家に帰って人生最期の時を過ごすことができた
 - 家に帰れたのはどうしてか?
 - 家に帰すために看護師はどのようなことをしたか?
 - 質問④そのようなことを起こした看護実践はどのようなものだったのか

キャッチコピーから 大見出し・小見出しへの洗練

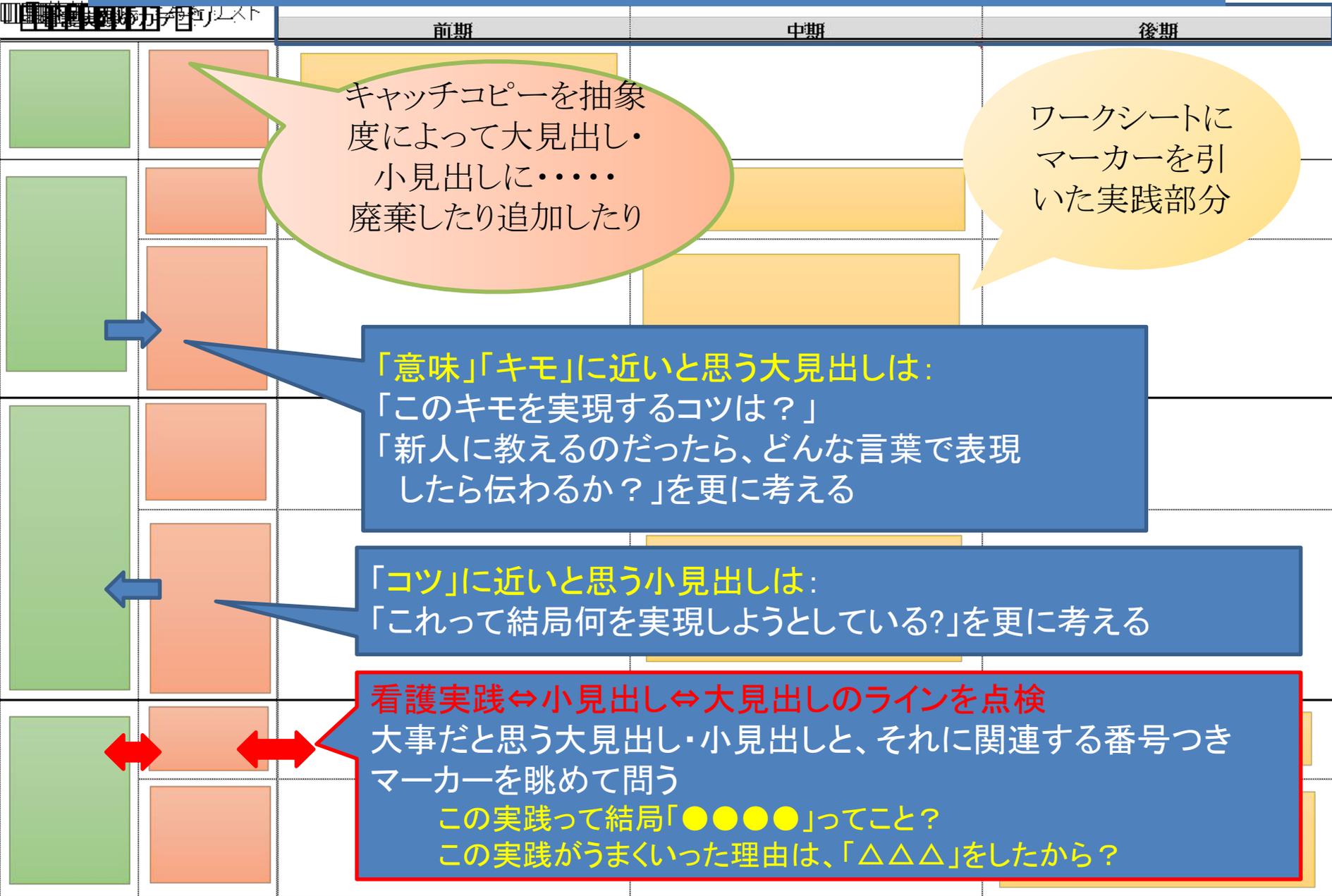
- 「そもそもこの実践は・・・についての実践だよね。」「この実践のキモは・・・だよね」と言えそうなキャッチ
>>>「大見出し」に洗練させていく。
- 「これって実践する上でのコツだよね」「新人に教えるときはこのぐらい具体的に説明しないと分からないよね」
>>>「小見出し」に洗練させていく。

表づくり

目録		前期	中期	後期
1	2	3		
4	5		6	
	7		8	
9	10		11	
	12		13	
14	15			16
	17			18

「表」のファイルは、東京大学 高齢者在宅長期ケア看護学分野
 ホームページよりダウンロードできます。
http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/j_201512.html

全体を眺めて「タイトル」を考える



「大見出し」「小見出し」は 廃棄・追加して良い

- 最初のキャッチコピーは思いつくまま
>>大見出し、小見出しで整理していくうちに、足りない小見出し・大見出しが出るかも。
- 不要なキャッチコピーは廃棄してよい
- 足りない大見出し・小見出しは、ここで新しく作ろう。

表づくりのための問い

- 看護師は何を行ったか
- どうしてそうしたのか
- 実践の意図は何だったか
- 患者・家族に起きたのはどんなことか
- 「潮目」(転機)はどこか
 - 家に帰れたのはどうしてか
- その転機を起こした看護師の働きかけは何か
- 患者・家族の変化を引き起こした看護実践はどのようなものか
 - 家に帰すためにどのようなことをしたのか
- 別の時期にもやっていたか
- 小見出し同士にはどんなつながりがあるか

修正後の表

□ 具体的実践行為をリスト □ 看護実践行為		前期	中期	後期
Blue box	Orange box	Yellow box		
Green box	Light orange box		Yellow box	
	Dark orange box	Blue box	Yellow box	
Grey box	Orange box		Yellow box	Yellow box
	Dark orange box		Yellow box	Yellow box

「表」のファイルは、東京大学 高齢者在宅長期ケア看護学分野
 ホームページよりダウンロードできます。
http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/j_201512.html

どちらの大見出し・小見出しが面白い、なるほどと思いますか？

A

B

大見出し	小見出し
在宅緩和を図る	本人の痛みを管理する
	妻の心理的負担を考慮する
迷っている家族の意思決定の負担を軽減する	家族の迷いを受け止める
	負担を軽減する
思いの表出により意思決定を支援	思いの表出を支援する
	思いを打ち明ける支援をする

大見出し	小見出し
在宅療養の安定を図る	家族の介護体制を尊重する
	本人の苦痛症状を軽減する
家族間の膠着状態を緩める	療養場所のイメージを広げる
	異なる意見をそれぞれ支持する
家族の衝突を機に切り込む	言葉の変化を嗅ぎ取る
	アポイントなしの訪問で一気に調整する

面白い、なるほどと思える違いは何か？

面白い

- へー、そうすればいいんだ、と思える。自分では考えつかなかったアイデアが入っている(新規性)
- 次の患者に使えるそうと思える(有用性)
- 聞いたら、(なんとなく)その場がイメージできる(共鳴性)

面白くない

- 教科書で聞いたことのあるフレーズばかり(新規性)
- で、結局どうしたらいいの？と突っ込みたくなる(有用性)
- 状況と実践の様子が、ピンとこない(共鳴性)

キャッチコピーづくりって、必要？

- 実践をグループ分けして島づくりからだけではだめ？
- 発想が限られてしまう
- 分断化された内容だけ見ていると
- 高度に統合化された看護実践の「意味」に到達できない
- 抽象度の高いキャッチだけだと、個々の看護実践がどのような意味を持つのかがつながらない

看護実践の カテゴリー/ サブカテゴリー	時間の経過と時期 (前後の時間とオー バーラップあり)	ケアの実際を娘に経験してもらい娘の気持ちの 変化に注目した時期	速やかに退院を調整し安心して暮らせてもらった時期
もう一歩工夫し て患者・家族を 知ろう	<p>①夫と妻の話を促すために間に入って以前の生活について伺った。 ③患者は「カーテンを開けておいて欲しい」。理由を確認する ④雑談の中から家や家族に対する考えを確認することで、患者が安らげる時間を持つてる支援について考えるようにした。 ・『夫が無言で座っていることが多い』『患者は日中を問わず外を見ている自治が多い』。患者家族の様子をみて会話の糸口を探るようにする。</p>		<p>・患者「病院は気楽でいいけれど、帰れるなら帰りたい。家族の生活を変えたいとは思わなかったけれど、帰れる。ことはうれし い。」。患者自身の本当の意向を確認する。 ⑦患者に退院に際して不安なことについて話題に出して確認。 ⑧娘には、病院でのケアについて書面で提示した。</p>
後悔させたくない！患者と家族 をつなごう	<p>④雑談の中から家や家族に対する考えを確認することで、患者が安らげる時間を持つてる支援について考えるようにした。 ⑤医療者間で、患者が「カーテンを開けて過ごす」ことを希望していることを共有し看護計画にも盛り込み共通の支援とした。</p> <p>①夫と妻の話を促すために間に入って以前の生活について伺った。 ②家族の退出時には「まだ続きをさかせてください」と添え、次も話の時間を持つてるように言葉を付け加えた。 ⑥夫や娘に今回はいつ来るかといった声かけや患者が面会に来る事を喜んでことを伝えた。</p>	<p>⑦食事の介助は、ベッドアップを90度にし、腰枕を入れて姿勢を整え、飲み込みを確認しながら行った。 ⑩来院時に患者支援を行う際には、娘に声をかけて一緒におこなった。 ⑫娘に、ケアをすべて抱え込む必要がないことを繰り返し伝えた。 ⑬食べ物や飲み物、マウスウォッシュなど娘からの提案は可能な限り取り入れるようにした。</p>	
療養先の変化の可能性を念頭に置く		<p>⑧家族がいるときには、ベッドアップを90度に行っている理由や腰枕を入れて姿勢が崩れない方法行動など、行っていることの理由を説明しながら介助をした。 ⑨娘に、一緒に介助をするように声をかけると患者も娘も嬉しそうな表情をしていることに注目した。</p>	
タイミングを逃すな！	<p>患者・家族の気持ちの変化に注目し確かめる</p>	<p>・娘「父と2人で自宅に居ながらお母さんの介護ができずいて、何かを工夫したらできたのかも しれないけれど逃げていたのかも」介助を拒否しているのではなく、何をしたいのかわからないのかも。自宅に患者をつれて帰ることが選択肢になる支援を考えた。 ⑨娘に、一緒に介助をするように声をかけると患者も娘も嬉しそうな表情をしていることに注目した。 ⑩面会を続ける娘に日中の母親の状況を伝えると安心した表情を浮かべたことに注目した。 ⑪娘に「寒いけれど体調を崩していない？」「面会に来てくれていることをお母さんはとても嬉しそうに話していましたよ」「差し入れ美味しそう ですね」といった声かけをした。娘は母親の介助をしながら「看護師さんによくしてもらってありがた いだよね。私も何かできたらいいんだけど・・・」と言葉にすることがあった。</p>	<p>・娘「家に帰るにあたり必要なことを教えてくれたらできる気がする」。「一緒に帰ろう。私にもできそう。」という言葉を受け、 ⑫自宅に帰るにあたり必要なことや予測される経過を伝えて娘と夫の気持ちを今一度確認した。家に帰る決定をしたことを後に後悔しないための確認をした。 ・夫の「娘が頑張りたいというから俺も一緒にやる」という変化を確認した。 ⑬自宅に帰るにあたり必要なことや予測される経過を伝えて娘と夫の気持ちを確認した。</p>
退院後も安心して過ごせるようにしよう	<p>在宅介護に向けて速やかに行動する</p> <p>退院後も家族が安心できるようにする</p>		<p>⑭酸素投与、終末期をキーワードに地域医療連携室と一緒に自宅近くの訪問看護ステーションを探索した。 ⑮訪問看護師と必要な準備について確認し進めた。</p> <p>⑯退院3日後、自宅と訪問看護ステーションに連絡をして、現状を確認した。「夫も訪問看護師の指導のもとに点滴の接続をしていた。」家族の変化や負担の確認によって支援を考えた。 ⑰退院後1週間後、現状確認・夜間のサービス活用を提案した。 ⑱永眠2週間後、訪問看護ステーションに連絡。</p>

本人・家族の希望に沿った終末期の支援を可能にした看護実践

—想定外も想定しつつ、ただ家族を繋ぐ—

2017/12/29 第27号 看護実践研究 (看護学)

関東 京子¹、山花 令子²、山本 則子²

¹ OX病院看護ステーション ² 東京大学大学院 医学系研究科

ポスター一例

背景

- 終末期をどう過ごすかは、本人・家族にとって重要なことである (山本2014)
- 終末期の介護においては家族に後悔が残ることが報告されている (山本2014)
- 本人・家族の希望を引き出し家族間の調整を迅速に行う看護実践の知の蓄積が切望されている (山本2014)

目的

終末期の患者・家族が自分たちの希望の変化に沿って退院し在宅看取りまで実現した事例を振り返り、終末期の支援の在り方を検討すること

発表要旨

終末期に患者・家族の希望が変化する場合、「患者・家族の理解」を踏まえながら「家族に後悔を残さない支援」を通して「療養場所に関わらず家族を巻き込み患者とつなぐ支援」や「タイミングを逃さない支援」で退院へとつなげた。「退院後も家族が安心できるように」支援を続けることが本人・家族の本当の希望を実現する支援として有効であった。

対象と方法

事例の概要

70代女性 (A氏)、家族は夫と30代娘。誤嚥性肺炎を繰り返し、施設からの入退院を繰り返していた。家族は当初「本人を家に連れて帰るのは無理」「仕事は休めない」と言っていたが、終末期が近づくと「最後は家で一緒に過ごしたい」と希望を表明するようになった。娘の決断の2日後に退院し、在宅で2週間経過して永眠した。

分析方法

1. 支援提供者が看護記録や経過を振り返り、期ごとに、患者・家族の言葉や看護計画をまとめて記載する。
2. 1. を元に、この経過を可能にした支援提供者の同僚看護師2名、大学講師とをつなぐ小カテゴリ名を検討した
3. 話し合いでは、まず実践の大きなカテゴリーとをつなぐ小カテゴリ名を検討した

結果

小カテゴリ名	患者・家族の言葉や看護計画	支援提供者の言葉や看護計画	結果
在宅での生活	在宅での生活は、本人・家族にとって重要なことである。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。
在宅での生活	在宅での生活は、本人・家族にとって重要なことである。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。
在宅での生活	在宅での生活は、本人・家族にとって重要なことである。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。
在宅での生活	在宅での生活は、本人・家族にとって重要なことである。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。	在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。在宅での生活を実現するために、在宅での生活を実現するための支援が必要である。

考察

- 入院後早期から、会話の糸口を探すなどして積極的に話しかけ、言葉や行動を観察し、意旨を確認しながら関わることで患者・家族の深い理解につながったと考えられる。
- 深い患者・家族の理解を踏まえ、患者・家族が後悔を残さないよう、安らいでつながれるように配慮した。療養場所が未定でもまずは家族をケアに巻き込むことで、どのような終末期でも後悔を残さないことにつながったと思われる。
- 療養先の変化の可能性を念頭に置きつつ、患者・家族の気持ちの変化に注意を払ったことは、患者・家族を焦らせることなくタイミングを逃さない支援につながったと考える。
- 家族が退院の意向を表明した後は、在宅介護に向けて速やかに行動し早期退院につなげ、在宅ケア関係者と穏やかに連絡をとることで、患者・家族の在宅療養に対する安心・自信を保つことにつながったと考える。



さあ、始めよう！